

# 賢治の 心象にある 青

多への読み手が賢治をイメージする色として「青色」を挙げているように、「青」は賢治を語るべきに特別な意味を持っています。例えば、吉本隆明の「宮沢賢治論<sup>★</sup>」では、「宮沢賢治の深淵はつねに青い色を伴っています。あらゆるものを除き去つたところの真実の人間的な色合を言ひませう」とを述べ、賢治の本質に迫る色として取りあげていきます。吉本がそう指摘する具体的な作品が「イギリス海岸の歌」です。

## 1 Tertiary the younger Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

あなしろ日破れ あなしろ日破れ

あなしろ日破れに おれのむけ

## 2 Tertiary the younger Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

なみはあなしろ 支流はあなしろ

たしむらこは修羅のなまむら

賢治作品の根底をなすキーワード「修羅」と「青」がともに詠い込まれていることは象徴的です。

★——1 吉本隆明「初期ノート増補版」(証行出版部)／1970年刊、光文社文庫／2006年刊収録。

「イギリス海岸の歌」はあなしろまなこの決定的な冷たさ青色を伴つて来ます。

恐らくは彼の宗教的諦念の深さが無形のまま反映して来るのだと。

★——2 「イギリス海岸」は、花巻町小舟渡付近の北上川沿岸に賢治がつけた愛称。

Tertiary (ターシャリー) は地質時代の新生代第三紀(約6550万〜2600万年前)の地質。

賢治は「イギリス海岸」に分布する泥岩を、第三紀の新しい地層と考へていました。

## 01 turquoise

### トルコ石

空のさまざまな青さを表現するのに、賢治は鉱物の青さ(緑色を含む)<sup>★</sup>を用いて印象をふくらませていきます。青系統の鉱物として最も多用されているのが、いわゆる「トルコ石／ターコイズ turquoise」です。美しい青色のため古くから飾り石として使われてきました。トルコが主産地というわけではなく、ペルシャ産のものがトルコ経由でヨーロッパに伝わったため「トルコ石」と命名されたものです。賢治はこのトルコ石を、アルファベット、カタカナ、漢字など、語感・視覚・聴覚面を考慮して、さまざまな表記を使い分けています。

賢治が盛岡高等農林学校三年時に校友らと創刊した文芸同人誌『アザリア 三輯』<sup>★</sup>には、次のような歌があります。

あかりまど仰げばさらはTurquoiseの板もて張られそ  
の継目ひかれり——(窓三首のうちの一)<sup>★</sup>

後に、これを推敲再編した短歌では、

★——1 青色と緑色

日本語では「青」と「緑」は混用されます。というのは、色名の古い歴史では、明(あか)・顕(しろ)・暗(くろ)・漢(あお)しか区分がなかった時代があり、緑系統の色は「漢」に包含され、総括的に「あお」と称されてきたからです。実際、私たちの日常生活でも交通信号の「青」は「緑色」で表されています(最近では青っぽくなってきましたが)。鉱物の青色の表現にも同様なあいまいさがあります。

★——2 Turquoise

正しく綴りはTurquoiseですが、賢治は意図的に誤記かわかりませんが、Turquoise、Turquoisを多用しました。